

この小論は朝日新聞社に於いて「週刊朝日」(昭和十三年十月二十三日號)に日本諸學講座といふものを掲ぐるを企てられ、その總論をものせよと委囑せられたるが自分はその器にあらずとして辭退したれど聽かれず、終にその依頼に應じてものしたるなり。そのうちに國學とそれが日本諸學の中心たるべきことを論じたるを以て、これを本論集の結論に充つるを妥當なりと認めたるが、國學研究會の秋葉氏が朝日新聞社の許諾を得られたる由にてこれをこゝに編したり。

日本諸學といふ名目を以て指し示されるものは如何なるものであるか。文部省に、今、日本諸學振興委員會といふものが有つて活動中である。そこにいふ

所の日本諸學とは教育學、廣義の哲學、法學、經濟學、歷史學、國文學、國語學、藝術學等のやうであるが、この外に政治學なども入るべきであらう。この講義では自然科學、醫學、兵學等にも及ぼさうと考へられてゐるやうに聞くが自分は工學、農學等の如きにも及ぼし得るやうに思ふ。

以上のやうにいふと、一切の學術が皆この範圍に入るものともいふことが出来るやうに見える。しかし、さうなると、日本諸學といふものは結局たゞ學問といふに止まるものでは無いかといふ疑問が生ずる。若し、一旦さういふ疑問が生じて、しかも、之に明かな答が與へられなければ、實際そんなものは無いといふことになるかも知れない。しかしながら私はさうとは思はない。尤も上にあげた種々の學問はそれ／＼その性質の差違によつて、それが日本的なるさまに於いても、種々の相を呈してゐるから、一概には論ぜられない。それらの事を明かにするには先づ、こゝに日本諸學の振興更新といふことについての目的、方針に就いて明かにしなければならぬであらう。

上に名をあげた諸の學問は從來から研究せられて來て、相當に成績を上げて

來たものであるから、今更振興を叫ぶ必要もあるまいといふ論もあらう。かやうな論は一往尤もの事であるといはねばならぬ。誠に從來のやうな風にしてそのまゝ進んで行くべきものであるならば何も今遽かにこのやうな企てをすべき必要の無いことはいふまでも無い。それ故に、この企ての生じたのは生ずべき原因があるのであらう。然らば、その原因は何であらうかといふに、それらの學は從來通りに存すべきものであるのみならず、／＼それを振興せねばならぬといふのであるから、この企ては更新を目的とするといふことは明白である。さうしてその更新を要する原因はそれらの學問に伴つてゐる弊を改めようといふ所にあるであらう。凡そ事物には利と弊とが往々にして伴ふものである。さうしてその事物が盛大になるにつれて利の著るしくなると同時に弊もまた著しくなるものである。學問にして見ても同様である。その學問が盛んになるとその利が大になると共に、今まで氣にもかけなかつたやうな弊も亦著るしくなり、事情に依つてはその弊に堪へられぬといふやうな事にもなるであらう。今日振興更新の叫ばれるのは要するに、その弊に堪へられぬといふ

ことに原因があるであらう。然らばさやうな弊は初めから防いで置けばよかつたのでは無いかと、今更言つて見てもそれは緑言に過ぎぬ。我々は徒らに緑言をいふべきでは無い。悪いと思へば、直に改めればよい。これが日本人の心の底に存する直日の靈の作用である。學問の弊は隱微のうちなきざしてゐるので容易に知り難いものである。しかしながら、その弊は改めれば改められるものである。これが人の心の微妙な點である。今日の日本諸學の振興更新といふことはその弊をすて、その眞の目的にます、力強く進まうといふ企てに外ならないものであらう。

然らば其改めなければならぬ弊といふものは何時頃から生じたのかといへば、それは要するに明治維新以後に生じた諸の現象に直接の原因が有るのである。何故かといへば、日本古來の積弊といふものは明治維新といふ前古未曾有の大改革により一往清算せられたものであつて、今日の弊はその大波動の名残若くはその大改革後に起つた新たな事柄、若くはそれに伴つて生じたものであるべきは理の當然であるからである。しかしながら、それは直接の原因であつ

て、その間接の原因を尋ねればその弊の一半は日本の國民性にあるべき筈である。日本の國民性はすぐれたものであるが、やはりそれにも弊が伴ひ易い。外來の文化の物珍らしさの爲に濫りに之に惑溺して、我國をして、頗る危険な状態に瀕せしめたことの少くなかつたことは古今の史實が之を證明してゐる。さてさやうな事が生じた時に淺薄な論者は一も二も無くその原因をその外來の事物に歸してしまふかも知れないが、さういふ事は間違ひであらう。さういふ際によく之を鑑別して、それを受け入れないとか、又はその弊を除くといふことにしておけば、さやうな弊害は生ぜずにすんだかも知れないのであるから、外來の事物から弊を受けたとしても、それを日本國に受け入れた以上、それを受け入れたものゝ責任といふものが有る筈である。さういふ時にその直接の弊はその外來の事物に有るに相違無いとしても間接の責任は日本人自體にある筈だ。しかしながら、國民性について今、こゝに論ずる必要は無い。何となれば今日このやうな企てが起つたのは明かに國民精神の上に自覺反省の生じた結果なのであるから、我々はその直日の靈の活動を十分に發揮すればよい譯だからであ

る。さうすれば、當面の問題は、その諸學に附隨する弊についての事柄であるのはいふまでも無い。

さうして見るとその更新を要する事、即ち如何なる弊が如何なる點にあるかといふことを明かにすることが第一の急務であるといはねばならぬ。明治維新以前は思想界の事は佛教と儒教とが中心のやうに見え、制度と學問とは大體漢學が中心となつてゐたのであつたが、明治維新以後はそれらがすべて勢力をば、歐米から來た事物に奪はれ、制度も學問も思想も一切歐米を標準とした事に殆んど一切の原因があるやうである。制度にして見れば政體の大から私人の生活を支配する末々の法規に至るまでが一切歐米の模倣であつた。學問も同様である。歐米に盛んであつて、我が國に未だ無かつた學問をば、そのまゝ取り入れただけに止まるならば、それは一往尤もなことゝいはれるであらうが、歐米に無いものは殆んどすべて之を否認しようとした態度は覺醒した今日から見れば、殆ど狂的といつてもよい程の有様であつた。思想も亦その通りで、はじめは亞米利加を唯一の模範とし、次いで、英佛、獨などがそれ／＼わが思想界の主流

であつた。かくして歐米は思想界、學術界の理想境であり、歐米の事物に通ずることが國家最高の人材の標準であつた。かやうな主義の爲に歐米に無くしてわが國にのみ在る特色ある事物は、一切未開野蠻の事物として舊來の陋習といふ一語で片づけられてしまつた時代であつた。今それらの際に破壊せられたものをあげれば際限も無い。その際にどうした間違か、とり残された少數のものが、今日國寶とか、史蹟名勝天然記念物とかいふ名目で國家の保護を受けてゐるのである。以上の事實に顧みれば、今、日本諸學の振興更新を必要とするこの原因が、それらの點に根ざしてゐることはいふまでも無いといはねばならぬ。然らばその更新は如何にして行はるべきか、又如何なる方面に行はるべきかといふことが、次に考へられなければならぬ問題であるといはねばならぬ。こゝに更新を要するものは如何なる學問であるかと顧みると、それはおのづから二に分れるのでは無いかと思ふ。今若し、日本諸學といふことを日本國、日本人に限定せられた事物だけを直接の對象とした學問といふ意味だとするならば、それは日本の思想、國體、法制、政治、道德、宗教、言語、文章、藝術、歴史などについて

の學問であらう。これらの學問に就いて見れば從來の最も著るしい缺陷は歐米に存在しない事柄についてである。それら歐米に存在しない即ち日本獨特の事柄は全く學問の對象として取扱はなかつたのであつた。これが從來の缺陷として最大のものであつて、その歐米崇拜時代にあつては大抵の人は多少この種の缺陷を有してゐたらしいのである。今その缺陷の例をいへば、國體といひ、神道といふものはいづれもわが國の世界無比なる特色中の最も偉大にして最も純なものであるが、歐米にはこれらに對しての出來合の理論が無い爲に學問として研究せられてはゐなかつた。又文學でいへば、連歌といふものは支那にも歐米にもかつて無いもので、それこそ日本國民性の著るしい發露であるが、俳句の研究を復活した子規の如きすら之を非文學だとけなして顧みなかつた。語學でいへば清音濁音の如き者は西洋には無い。そこでかやうな初歩的な學理的説明すらが明治の國語學者の考へ得なかつた事であつた。かやうな弊は今日なほ多大に存するのであるが、これらがこの日本諸學の更新の必要を叫びしめる原因をなしてゐることは疑ひも無い。以上は皆歐米にそれを説明する

のに應用せられるやうな理論が無いからである。そこでそれらについては從來の弊をすてゝ日本には日本の特色がありその特色は歐米在來の理論を持つて來ても役に立たないといふことを自覺することが必要である。かくして更新を要することの主眼點は歐米中心主義、西洋盲從の態度をすてるといふことにある。さうして振興せしむべきものは日本獨特のもの、東洋獨特のものにあることはいふを待たない。然らばそれら日本に關する諸學について歐米中心主義、西洋摸倣の盲從的態度をすてゝ、日本獨特のもの、東洋獨特のものを振興するにはどうしたらよいかといふ問題がある。しかし、私はそれに答へる前に他の方面即ち汎く一般に通ずる性質の學問についての考察にうつらねばならぬ。

日本國、日本人に限定せられた事物でないものを研究する學問、即ち世界のいづれにも通ずる性質を有する學問、たとへば哲學、法理學、經濟學、數學、自然科學、兵學、工學、農學の如きものは之を日本諸學振興更新といふ範圍に容れて論ずることとは不合理では無いかといふ疑ひがあらう。如何にもこれらは學問に國境なしといはるゝ學問の範圍に屬するものである。然しながらそれらは果して全

く或る國或る民族と特殊な關係の無いものであらうか。これについては二の方面に分けて見る必要がある。一は醫學、農學、工學、兵學の如き應用的性質を有する學問であり、一は自然科學、數學、哲學、法理學、經濟學の如き純理的性質を有する學問である。その應用的性質を有する學問についていへば、たとへば醫學に就いて考へて見ると、これは人の病の原因經過を明かにし之を治療する方術を研究するものであらうが、苟も人間を對象とする以上、世界共通であるべきものだといふことは勿論であるが、しかし、人種の差、民族の差、風土の差、習俗の差、其他種々の事情に依つて病そのもの種類や、有無や、多少やの差もあらうし、又原因の上、經過の上、治療の效果の上にいる／＼の差違があらうと思はれる。それ故にある國に於ては甲の病理、治術が發達してゐるけれど、乙の病理、治術は全く見ることが出来ないといふ事があるであらう。さうすれば、こゝにも亦日本的なるものと否との區別が自然に存するであらう。又農業に關する學術を見るに、これはその土地、氣候、又人生の要求や實施方法の差違があらうから、外國の農學がそのまゝわが國に用ゐられるかどうか疑はしいものである。工業もさうで

あるが、ことに著るしいものは建築である。これは氣候、風土、材料及びその民族の風習によつて著るしく違ふものである。かやうになつて來ると、その學問には國境が無いといつても或る國境に入ると、著るしく面目を異にするものにならなければならぬことがあると思はれる。

以上の應用的性質の學問は要するに、日本國、日本人に應用せられる場合に著るしく違はねばならぬことになるといふことを明かにしたのであるが、實はさやうにいふのはいひ方が逆なのであるやうに思ふ。これは、それらの學理が一般的に既に確立して動かすべからざるものであるのに、之を日本國、日本人に應用する爲に、之を日本國、日本人に適するやうにしたいといふべきものでは決して無い。すべて學問といふものはその研究對象の存在によりてはじめて發生するものであることはたとへば動物があるにより動物學が起つたので、動物學によつて動物が生じたので無いことは見易い道理である。それ故に、歐米で發達した諸學は要するに歐米に生じた事物を基礎として研究して得た結果に過ぎない。それらをわが國に輸入してこゝに新たな病理、治療、藥劑、農業、工業、兵法

等の理論なり方法なりを得るといふことはそれを應用の結果だといふのは通俗の見解であつて、實は從來の理論なり方法なりをわが國に於ける事物にあてて研究して擴張、訂正したのである。それはこゝに新たな見解、新たな理法が生じて學問が更新したのである。かやうにして日本の研究によつてその學が更新せられたとする時に日本諸學振興更新の中にこれが算入せられても不思議で無いと信ずる。

次には純理的性質を有する學問はどうかといふに、これらも思想又は生活に關するものと否とにわけて見ることが出来る。その思想又は生活に關する學問は要するに人に基づいて生じた學問である。こゝに問題になるのは今まで考へられて來た哲學などは西洋人の間に生じた思想を西洋人が反省して成立した學問である。日本人の思想がそれらと全然同一なら問題は無いが、實は随分違ふ所がある。眞理は一あつて二無いといふが、實はさう簡單に傍付けられない點がある。更に又人の生活に關する學問たとへば法理學、經濟學の如きものが、そのまま果して日本人の生活に即した説明をなしうるか。個人を出發

點としてゐるそれらの學が日本人の生活を説明するには未だ適切なものにはなつてゐないことは著るしい事實である。以上思想や生活や、苟くも實質上人生に關する學問はやはり著るしく民族的傾向を帯びるものである。それ故に、日本人に關する場合に、それらは著るしく日本的になることは自然のことであり、西洋のみで發達したそのまゝの學理で通用しかねるもので、これらも亦わが國に入れば、この國と人との特色によつて擴張、訂正せられて、こゝに更新が生ずべきである。次に又數學とか自然科學とか人生を對象とせぬものに於いても略同様である。自然科學は實に世界共通の學問であるけれども、動植物、岩石、地質の如きものは、その國土によつて著るしく違ふことが少からずある。又數學の如きは一面はその學者の頭腦によるものであるから、かへつてその人によつて特色を發揮することは和算の研究を見てもわかる。それ故に學問に國境無しといはるゝ、學問にも日本的の特色の存するものである。

以上、私はすべての學問について一往の説明を加へたが、それらのうちに於いてもわが日本國、わが日本人、そのものゝ眞相を明かに知らうとする一群の學問

をば別に考へるのである。これは日本國日本人に限つた事物を研究する諸の學問と民族的傾向を帯びる性質の諸學、廣義の哲學、法理學、政治學、經濟學等である。これらが實は一括せられて眞の日本諸學といはれるべきものであるが、これらは日本國の本然の姿、日本人の本質等すべて日本的なもの、神髓を明かにするといふことを一の目的とした時に、それらの諸學問はすべてこの唯一の目的に對して全體に對しての部分となるであらう。これらが個々の學のたゞの集合にあらずして有機的關係を有して一の目的とするものとして統合せられた全一的の學問が古來國學と稱せられたものである。即ち國學といふものは日本諸學を統一する王座に位する學である。この統合せられた國學といふものがこれ亦世界無比のものであるが、西洋かぶれの學者はこれをもやはり認め得ぬであらう。

以上私は日本諸學といふ場合、その中心となる性質のもの、その他種々の場合を見て來た。それらのうちに日本に即した研究が未だ無いならば、之を勃興せしめ、現在あるものはますます實地に即した適切なものに發展せしめなければ

ならぬことは明かである。そこで小論の及ぼさうとした範圍は大略説いたとして次に研究法の上に目を移す。

研究法上の問題は先づその研究對象に即せよといふことである。この方面では又、二つの有様を呈してゐる。一はその對象がわが國にはあるが外國には無いといふものである。それらについては既に述べたから、こゝには注意を加へておくに止める。他の一は、似たものは西洋にあり、そこで研究はして來たものゝその研究が、まだまだ神髓に觸れてゐないと考へられるものに就いてである。それらの項目は數限りも無いから今列舉せぬ。さうしてそれらの無數の事項がこゝに統合して一の美的組織を成すに至るべきものであらうと信ずる。元來日本國は國そのものが一の美的組織をなしてゐるものであつて美そのものがこの國に於いてあらゆるものゝ第一原理である。これは西洋の學問が分析を主としてゐるに對して著るしい相違である。わが學問でも分析はすべきであるが、それに止まらずして統合せられた美に至らねば何としても満足しないのは日本人である。かくして世界のあらゆる學術が、この日本的美の原理に

よりて統合せらるべき時代の必ず來るべき運命にあることを私は確信する。さて上に述べた日本その者を對象とする諸學とその他の諸學とは客觀的に見ればその性質を異にしてゐるけれど、主觀の方面としては共通する根柢がある。それは學問の對象は客觀的存在であるけれど、學問そのものは必ず人間思想の所産であるからである。それ故に英國に生じた學問は英人の思想の反映であり、佛國に生じた學問は佛人の思想の反映であり、獨逸國に生じた學問は獨逸人の思想の反映であるといふやうに學問そのものゝ一面は必ず研究者の思想の反映である。さうして民族が多少なりとも、思想の傾向が違ふとすれば、その學問そのものゝ上にもその研究法の上にも多少の傾向の差の生ずるのは止むを得ぬことでもあり、又當然のことでもあらう。かくして考へて見るに、あらゆる學問はそれが日本人によつて眞摯に研究せられる時に日本の特色を帯びるに至るであらうことは疑ひが無い。しかし、それには日本人の長短共にあらはれるであらうから、それが完全無缺だといふことは出來ぬであらうが、さればと云つて、日本的なものすべてをすて、西洋のまねをしてゐたのではない

つまで經つても日本の學問だといふことは出來ぬであらう。かやうに考へてみると、この際日本諸學を振興更新するといふについても自ら顧みて、その短を避けて弊を未萌に防ぎ、その長を發揮するといふ心懸けが同時に必要だといふことはいふをまたぬ。

日本諸學の振興更新をはかるといふことは要するに、上述のすべての點に考慮をめぐらして眞に日本に行はれる學問として愧ぢない學問を樹立しようといふ點に目的があるであらう。この際附け加へていふべきことはわれ／＼が西洋傳來の學問で嫌らぬといふことは何も排外的とか攘夷的とかいふやうな精神からでは無いのである。すべて人生に於ける諸般の事象は皆歴史に因縁を有するものである。歴史を顧みずして行ふ改革はその事の成立すべき根柢を有しないから失敗に終るを常とする。日本諸學の振興更新が日本を基礎とすべきことは當然である。その日本的の學問に於いて日本の事實に即して日本的の考へ方を求めるのは當然として、その他の世界的學問の方面に於いてはどうかといふにこれにも日本の研究を要する。それはあらゆる學問をして眞

に世界的たらしめる所以である。今まで世界的であるといはれた學問が日本の事物の研究に通用しないやうであつたら、どうしてそれが世界的であり國境無しといふことが出来ようぞ。現在に於いて日本を算入せずしては世界とはいはれまい。更に亦日本の事物の研究の参加が無くしてどこにその學問の世界的だといはうる實があらうか。それ故にそれらの學問には日本の事物の研究や、日本の研究法が参加してはじめて眞の世界的の學問としての本色を發揮することになるであらう。而してそれは一面に於いて日本をして眞に世界的たらしめる所以でもある。

八、平田篤胤・撰_二古史_一之時祈願神等詞

古史徵卷一附錄 〓 複寫

附錄

謹請蒙 鴻慈創造國學校啓

荷田東麻呂

誠惶誠恐頓首頓首謹聞伏惟

神君勃興山東霸功一成平章天下艸上之風孰越君

子之志維新之化始建弘文之館庶矣且富又何之

加

明君代作文物愈昭光烈相繼武事益備濟濟焉蔚蔚

焉鎌座氏之好儉庸何及于斯乎郁郁乎斌斌乎室

町氏之尚文豈同日之談哉應此昇平之化天生寬
仁之

君以其天縱之資國見不嚴之教野無遺賢倣陶唐之
諫鼓朝多直臣擬有周之官箴上尊

天皇專不譎之政下懷諸侯而來包茅之貢道齊有暇
則傾心於古學教化不周則深治於先王購奇書於
千金天下聞達之士嚮風探遺篇於石室四海異能
之客結軾臣嘗遊都下之日幸蒙射策之捷忝不顧
謏劣之義偶有校書之命浴于忘布衣之恩誰爲
爲之誰令聽之子遷氏之言深有取焉雖有智慧不

如待時鄒孟子之意良有以也當時旣有意於賴

幕府之威靈起此大義借

大樹之庇蔭達臣素願而不敢者私心竊以跬步不已
跋鼈千里犬馬之年未滿六十今日之美安知不爲
異日之醜後進之知豈識不如先輩之能愚而自用
難免螻斧向車之謗賤而自專似忘燕石銜人之羞
有志而不遂千里遲遲歸豈圖卒有採薪之憂驥驥
徒伏槽櫪之間何意爲造化小兒苦鴻鵠長繫樊籠
之中口不能言同陳仲子之居於陵脚不能行似下
和氏之在楚山爲世廢人噬臍何及遇時窮阮嘯眉

獨泣天之將喪斯文也命也天之未喪斯文也時也時之不可失不敢不告也今也洙泗之學隨處而起瞿曇之教逐日而盛家講仁義步卒廝養解言詩戶事誦經闍童壺女識談空民業一改我道漸衰紀土州嘗嘆焉田園競捨資產傾盡善相公深痛矣臣竊以是亦足以見太平日久之象唯有爲可痛哭長太息者在我

神皇之教陵夷一年甚於一年

國家之學廢墜存十一於千百格律之書氓滅復古之學誰云問詠誦之道敗闕大雅之風何能奮今之談

神道者是皆陰陽五行家之說世之講詠誦者大率圓鈍四教儀之解非唐宋諸儒之糟粕則胎金兩部之餘瀝非鑿空鑽穴之妄說則無證不替之私言曰祕日訣古賢之真傳何有或蘊或奧今人之僞造是多臣自少無寢無食以排擊異端爲念以學以思不興復古道無止方今設非振臂張膽辨白是非則後必至塗耳塞心混同邪正欲退則文已漂已晦欲進則老且病且僊猶豫無所決狼狽失所爲伏此請望或京師伏陽之中或東山西郊之間幸賜一項之閑地斯開

皇國之學校然則臣自少所蓄祕籍奧牒不少至老所訂古記實錄亦多盡皆藏于此備他日之考索僻邑之士爲絕難及者或有寒鄉之客有志而未果者間多借之讀之才通一書百王之澆醜此知洞覽千古萬民塗炭可拯幸有命世之才則盡敬王之道不委于地若出咏王之器則拂本氏之教再奮於邦六國史明則豈翅

官家化民之小補乎三代格起則抑亦

國祚悠久之大益哉萬葉集者國風純粹學焉則無百
墻之譏古今集者詩詠精選不知則有無言之誠夫

本邦設施學校權輿于近江

朝廷主張文道濫觴於

嵯峨天皇管江家有分彰院源藤橘和繼起太宰府有
學業院足利金澤延及然所藏三史九經陳俎豆於
雍宮其所講四道六藝薦蘋蘋於孔廟悲哉先儒之
無識無一及

皇國之學痛矣後學之鹵莽誰能歎古道之潰是故異
教如彼盛矣街談巷議無所不至吾道如此衰矣邪
說暴行乘虛入憐臣愚衷創業於國學鑑世倒行垂
統於萬世首創難成功非經國大業邪繼續易用力

真不朽盛事哉臣之至愚何之知所不敢自讓者語
 釋也國字之多紕繆後世猶有知之者典籍猶存古
 語之少解釋振古不聞通之者文獻不足國學之不
 講實六百年矣言語之有釋僅三四人耳其為巨擘
 新奇是競極無超乘骨髓何望古語不通則古義不
 明焉甘講不明則古學不復焉先王之風拂迹前賢
 之遺迹荒亡由不講語學是所以臣終身精力用盡
 吉語也徒以斯文之興之與廢固在此舉之取之與
 捨願

閣下留意幸察臣東麻呂誠惶誠恐頓首頓首謹言

寬政十年戊午孟秋發行

平安書肆

吉田四郎右衛門
 木村右右衛門
 林伊兵衛
 能勢儀兵衛
 野田儀兵衛
 佐木惣四郎

此能傳語乎。迦爾加久仁考別如撰集。開百結。二
 已我比。伎。自。然。女。訛。事。取。仁。出。來。傳。別。波
 世。古。事。乎。人。世。傳。留。為。語。錄。經。問。か。
 禮。志。可。畏。之。然。波。在。礼。八。百。萬。歲。千。萬。年。登。遠。都。神
 氏。美。在。乎。其。御。惠。能。尊。使。香。條。二。表。言。樂。廿。年。不
 地。義。理。乃。本。根。味。畏。美。窺。比。得。臣。頂。か。尊。長。尊
 安。國。重。平。郊。天。下。能。公。民。乎。惠。美。賜。比。撫。賜。布。大。道
 万。千。秋。乃。長。秋。仁。現。御。神。登。大。八。嶋。國。所。知。者。志
 尔。ヨ。コ。ツ。チ。ア。キ。ノ。ナ。ガ。ア。キ。ニ。ア。キ。ツ。ミ。カ。ミ。ト。オ。ホ。ヤ。シ。マ。ク。シ。ロ。シ。シ。志

備。八。十。結。二。備。臣。千。尋。拊。繩。唯。一。條。仁。打。延。氏。其。正
 語。波。正。語。登。滯。里。無。久。窺。比。悟。良。波。斯。伎。乎。筆。撰。結
 備。整。明。書。記。欲。久。負。氣。無。比。思。比。隱。在。礼。多。夜
 須。禮。是。年。許。呂。在。都。流。今。度。學。乃。徒。等。其。事。伊。佐
 勢。登。志。斐。伊。謝。奈。布。賀。寂。異。尔。所。聞。仁。依。熟。ニ。尔
 思。閉。如。此。伊。謝。那。布。波。即。神。等。乃。御。心。留。伊。佐。世
 牟。登。思。比。起。氏。志。耶。世。流。尔。故。此。十。二。月。過。五。日。登。云
 日。乎。生。日。能。足。日。登。撰。定。米。業。始。為。臣。今。年。登。云。年
 内。表。限。夜。半。曉。時。登。休。息。事。無。久。夜。日。不。知。尔。一

〇古史微一之卷附講詞

(出文協承認)
あ 270186 號



昭和十七年十一月十二日 印
昭和十七年十一月十七日 發

刷 行 (10,000部)

圖書の本義
◎ 定價金貳圓五拾錢

著 者 山 田 孝 雄

發 行 者 吉 村 清
東京市麹町區九段一丁目十六番地

印 刷 者 大 貫 善 次 郎
東京市神田區神保町三丁目二十九番地

配 給 元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

東京市麹町區九段一丁目十六番地

發 行 所 株式會社 畝 傍 書 房

會員番號 一〇三五〇一
電話九段(33) 四九七二番
振替東京一六六六四六番

弊社發行の書籍にて眞一落丁・亂丁等の不完全な品がありました節は、何卒御遠慮なく御申出下さい。早速御取換へいたします。

文學博士 山田孝雄著

平田胤篤

B6判上製函入一三〇頁
定價一圓五十錢送料十五錢

今年篤胤先生の百年祭を迎ふるに當つて、その刻苦の生涯と翁の學の精神とを極めて簡明、且つ平易に説かれたる名著。

文學博士 山田孝雄著

連歌青葉集

B6判横和綴三三〇頁
定價三圓送料十五錢

短詩形文學の源泉とも謂ふべき連歌が、明治以來久しく跡を絶つてゐるのを遺憾として其復興を圖るべく催された詠草集。

國民精神文化研究所員 三宅清著

荷田春滿

A5判上製函入六二六頁
定價六圓五十錢送料二十錢

春滿こそは國學の四大人の最初の祖とも云ふべき人、本書は從來兎角不備の點多かつた春滿學を詳解せる貴重な文献。

文學博士 清原貞雄著

國學發達史

A5判上製函入四二〇頁
定價四圓五十錢送料二十錢

本書は純正日本精神の神髓を詳さに國學發達の跡に求め、四大人初めその他門流の諸説と業績を比較討究せる勞作。

株式會社

東京・麩町・九段下 敝 傍 書 房 振替東京166646





